



Title	パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (IV)
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学論集. 1991, 6, p. 161-178
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パンジャープ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (Ⅳ)

松 村 耕 光

The Anjuman-e Panjab and Its Efforts to Reform Urdu Poetry (Ⅳ)

Takamitsu MATSUMURA

This is the second half of Chapter 3 which deals with the *mushā'aras* of the Anjuman-e Panjab.

The contents are as follows:

Chapter 3. The *Mushā'aras* of the Anjuman-e Panjab (Second Half)

(6) The Fifth *Mushā'ara*

(7) The Sixth *Mushā'ara*

(8) The Seventh *Mushā'ara*

(9) The Eighth *Mushā'ara*

(10) The Ninth *Mushā'ara*

第3章 パンジャープ協会の詩会 (承前)

(6) 第5回詩会

第5回詩会は、1874年10月に開催され⁽¹⁾、詩題は「平和」(amn)であった。この詩会には、10名の詩人が参加した⁽²⁾。

この詩会でアーザードが発表したのは、「平和の夢」(Khawāb-e amn) というマスナヴィーで、169詩句ある⁽³⁾。

内容は、凡そ、以下の通りである ——

終日の災難に疲れ果てた「私」は、眠り込んでしまい、夢を見る。夢の中で「私」は、とある

庭園に赴くが、それは平和の支配する庭園で、騒音もなく、争いもない。庭園の中には、「平和の王」(Khusrau-e amn) の宮殿がある――

この世の騒乱に大いに苦しんでいた私は
この平和を、哀しむ心の思わぬ好運と見てとったのです
即ち、心の思いは宮殿に私を連れていったのです
驚きに満ちた魅惑の世界を私に見せてくれたのです
平和の王が、そこでは、宮廷の威光を増しており
宮廷の風は心と命に喜びを与えていたのです
その前では願いの花園が花開いていたのです
自らは花の揺り椅子に横たわって揺れていたのです
眠りのそよ風が揺り椅子を揺すっており
孔雀の扇を頭の上で安らぎが動かしていたのです
太陽の花は、そこでは、いつも皆水々しい花であり
日差しの代わりに、いつも月の敷布があったのです
そこでは、朝が、昼夜、前に立って微笑んでいたのです
そこではいつも、光と共に露が降り注いでいたのです
そこではいつも、願いが御前に控えていたのです
望みが御前でシャンシャンと踊っていたのです
富と安楽と歓喜が宮廷の貴族で
皆、宮廷のために統治を行っていたのです
そこでは心に心配事は一つとしてなく
そこではあらゆることが満足的手中にあったのです
草原を覆う全ての樹木は
平和と平安の裳裾を人々の上に広げていたのです
そこではあらゆる人が自分の仕事に熱中し
そこでは安息と休息の花と実を採っていたのです

突然、そこへ一人の老人が現われる。人品骨柄卑しからぬこの老人には、本やファイルを抱えた人々が従っている。一同の者は、「平和の王」の前に進み出て、「知識」によって派遣されたのだと述べ、著作、学問、教育が満足に行えるのは「平和の王」のおかげであると感謝の言葉を述べる。

一同の感謝の言葉が終らない内に、別の一団が現われる。馬や牛と共に現われたこの一団は、農民の代表で、「平和の王」に、農業が栄えているのは、王のおかげであると感謝する。

この後、商人の一行、次いで産業、手工業の代表者達が現われ、「平和の王」に感謝の言葉を述べる。すると突如、宮廷が輝き出す。富の妖精が宮廷に現われ、汝のおかげで、この世の者は皆満足していると歌を歌う。そこに砂漠の方から声が聞こえてくる。宮廷の様相が一変し、人々は声のする方に行き始める。「私」もまた見に行くことにする。行くと、一人の男が人々に向けて次のように演説していた――

来い、すぐに来い、お前を男にしてやろう
勇気の盃を胆力の酒壺からお前に飲ませてやろう
平和の王国はお前を意気地なしにしまった
安楽と快楽はお前を何の役にも立たないようにしまった
昼も夜も安逸の具の中で暮らしている
昼は花園で、夜は寝室で暮らしている
惰眠の中で、手足を伸ばして眠っているのだ
勇気や志もお前と共に眠っているのだ
勇気、剛気には何の用もなく
祖国には進歩の力の何のしるしもない
平和の王のために地面に接吻し
昼夜、座り込んで、阿片中毒者のように酔っている
この所業は若いのに前を老人にしまった
捕えることもなく前を鎖に縛りつけてしまった
来い、その災いの束縛から前を自由にしてやろう
そして天与の発展の持ち主としてやろう
腕の力でお前は世界を征服するのだ
運命の手を方策に結び付けるのだ
安楽はお前を心から悲しませた
心の衰弱はお前を勇気から遠ざけた
平和はお前を安楽の奴隷とした
そして前を安逸の寝台の奴隷とした
私はお前を世界の征服者、世界の遠征者として
もし男であるならば、前を若武者として
その足は世界の広野を測ることになるだろう
世界の荒野を瞬時に一つとすることだろう
前はあらゆる事を安楽の内に失ったのだ
前は国の名をこの世から沈めてしまったのだ

私は今すぐ地上から天上へと連れてゆくだろう
太陽のように世界にお前を輝かせるだろう

この男は、「世界の攪乱」(Āshōb-e jahān) という名の男で、世界に混乱を起こすのを常としていた。平和の国の世間知らずの者達は、この男の演説を聞いて、すぐに手下になってしまう。男は彼等と呼び寄せ、この国から「平和の王」を追放しない限り、この国はよくならない、これには諸君の助けが必要だ、と囁く。そして男は、彼等を引きつれて町を攻撃しに行く。この男の大きな攻撃の声で世界は震え、「私」はそれで夢から目を覚ます。

以上が、このマスナヴィーの内容である。当時の人々にとって、「平和の王」はイギリス、「世界の攪乱」によって引き起こされる混乱は、1857年のインド大反乱を意味した筈であり、アーザードとしては、「平和の王」(イギリス) による平和の重要性を言いたかったのであろうが、——そう言うしかなかったのであるが——平和の敵、「世界の攪乱」の演説が、惰眠から目覚め、行動によって国を救えという、それ自体は正当な内容であるため、作品としては詩題不鮮明なものになっている。

アフマド・カーンは、アーザードへの書簡(1874年10月19日付)の中で、この詩について次のように書いている。

「あなたのマスナヴィー『平和の夢』が届きました。とても心が楽しみました。実際、詩と詩作の力に称賛を贈りましたが、今尚、それには空想的なところがたくさんあります。自分の作品を一層ネーチャーの方に向けて下さい。作品がネーチャーの方に向けば向く程、それだけ面白味を与えるようになるでしょう。(4)」

尚、ギャルサン・ド・タッシーは、この詩会について、何も記録していない。

(7) 第6回詩会

第6回詩会は1874年11月14日に開かれ、詩題は「正義」(inṣāf) であった。この詩会には、ハーリーを含む、13名の詩人が参加した。

この詩会で、アーザードは、192詩句から成るマスナヴィー「正義の称賛」(Dād-e inṣāf) を発表した(5)。

この詩もまた、前作と同様、夢の世界を舞台とする空想的な内容である。即ち——

悲しみに塞ぐ心のために、「私」は眠ることが出来ない。それで想像の図書室を開けてみることにする。様々な本や巻物の中から、「私」は、「正義の王」の家の歴史を記した巻物を見つける。それには次のように記されていた——

「正義の王」は、王子時代、「礼儀」や「学問」に十分指導される。そして何か榮譽を授けてもらうため、大天使の所に連れていかれる。大天使は王子の礼儀正しさに満足し、王子に「正義

の王」(Khusau-e inşāf) という称号を授け、悪徳の場となってしまった人間世界に正義をもたらすべく、王子を人間世界に派遣する。「正義の王」は、片手に剣、片手に物事の善悪、本質を鏡のように映し出す角灯を持って地上に現われる。審判を開く準備が整うと、不当な目に会い、苦しめられている者に正義をもたらそうと宣言する。集団毎に来るよう人々は命じられ、最初に呼ばれたのは、何か財産を所有している者達。彼等は財産の正当な所有を証明する書類を差し出す、角灯の光に照らされると、それらが偽物であったことが判明する。かくして彼等は財産を没収される。

次に貴族が現われる ——

まず最初に彼等は前へ進み出たのです
持って来た高慢の旗を前へ持って出たのです
しかし、「正義」がその角灯を振りかざすと
「正義」の明りがその月光で覆うと
この世でいつも無名で卑しまれていた人達が
そして目ざましい働きをしても無益であった人達が
今やその顔を名誉の光で輝かし始めたのです
その頭上に栄光の旗をはためかせ始めたのです
しかし、謁見の場に威風堂々と現われた者達は
その横暴な者達はそれでも呪術から手を引かなかったのです
望みの請願のために術策を弄し
自分を推挙するための多くの手紙を持って来たのです
真理の前では、しかし、如何なる話も効果なく
彼等の話は結局無駄に終わったのです

次に現われるのは、富と権力をかさに人々に横暴をふるってきた者達である。主君達は、彼等を善良な者と思い込んでいたが、実際には、彼等の下で、人々は暴虐に喘ぎ苦しんでいた。彼等に角灯の明りが向けられると、その正体が暴露される ——

抑圧の手を暴虐者達は振り上げることも出来ず
のみならず、行った横暴を隠すことも出来なかったのです
「正義の王」が怒りの目を突然向け
こうして彼等全員の上に火花の視線を向けると
獅子の皮でいばって現われた者達は
そして歩く時には誰彼となく争って現われた者達は

その者達の衣服は全て焼けて地面に落ち
そして覆いから脱け出てその不遜な者達は倒れたのです
「正義の王」の威光で震え出し
全員が狐のように見え始めたのです
「正義の王」はその時全員にこう呼びかけたのです
そして使者がそこに来て全員に告げ知らせたのです
今まで彼等の下にあった者達は、勇気を持って彼等の上になれ
そして常に支配されていた者達は、獅子のように彼等の上になれ、と

宗教指導者、苦行者達も、アーザードによって徹底的に揶揄される。前者は、身なりも良く、
恰幅も良いが、モスクに横になって無為に日を過ごしている者と嘲笑され、後者は次のように戯
画化される――

「我等はこの世の何の快樂も得なかったのです
我等はこの世の何の安樂も得なかったのです
この世の幻惑には一度も囚われず
そしてこの世の安樂を一度も知ることはなかったのです
今日、我等に聖者の榮譽を与えて下さい
奇跡の王冠によって我等に榮譽を与えて下さい」
一人一人がこの言葉を聞かせると
「正義の王」はその角灯を動かしたのです
神智が燃える蠟燭を持って突如現われ
物事の本質を示しながら現われたのです
欺瞞と嘘は全てけし飛んでしまい
神聖な禁欲も偽善も全て暴かれてしまったのです
この世に何の関心もないと言っていた者達は
女性のことなど聞いたこともないと言っていた者達は
そこで見てみると酒と盃の友と判明したのです
彼等の知り合いもそこに現われて来たのです
即ち、数人の女性が泣きながら現われ
パンとお金を求めて走って来たのです
数人の子供がパパ、パパと言って現われたのです
しかし、この者達は恥じ入って立ちすくんでいたのです、パパは何を言えようか、と

この後、他人の著作を批判してばかりいる者達が現われるが、謁見の場にいる人達に追い返される話、軍人、文筆家、一芸に秀でた人々が争いながら謁見の場に現われる話と続く。これに次ぐ終結部では、官職を与えるので、官職にふさわしいという証拠を持って来るように、という「正義の王」の布告によって、人々が数多く現われる様子が描かれる――

その中には榮譽を要求する者達がいたのです
彼等は姿形の美しさをすら誇りとしていたのです
先祖の古びた礼服を飾って現われたのです
そしてその書物から演説を聞かせて現われたのです
しかし、彼等が謁見の場に審判のために現われた時
そして「法螺」が彼等を代弁するために進み出た時
「正義の王」は少し角灯を輝かせたのです
探求の光が少し輝きを見せたのです
彼等の本性が明らかになると彼等は狼狽して後ずさりし
そして前に出た者達は後ろに恥じて下がったのです
「正義の王」はそれから注意深く全員を見
まず一人一人の家柄を見たのです
その中で高貴な者達と思われた者達は
そしてさらにその中で有能な能力を持つと思われた者達には
側に呼んで多くの榮譽を与え
そして彼等を高い官職に就けたのです

官職をもらえなかった者達が騒ぎ出し、それで「私」は目を覚ます、というところでこの詩は終わっている。この詩は、アーザードの、いわば旧体制批判の詩であり、アーザードの時代認識が如実に反映されている点に注目しておく必要があろう。

さて次に、ハーリーの詩を検討してみよう。ハーリーがこの詩会で発表したのは、119詩句から成る、「慈悲と正義の論争」(Munāẓarah-e raḥm-o-inṣāf) というマスナヴィーである。これは、慈悲と正義を擬人化し、前者が後者を非難、後者がそれに反論するという内容の寓話的なマスナヴィーである――

或る日、「慈悲」が「正義」の所に行つてこう尋ねる、汝が世界で名声を博しているのは何故か。汝には如何なる美点があるのか。汝は敵も味方も区別しない。汝は年少の者を可愛いがりもせず、年上の者を敬いもしない。王も乞食も、汝の所へ震えながらやって来る。友であれ敵であれ皆汝を恐れている。汝はヒンドゥーの友でもなく、ムスリムの友でもない。汝のように無慈悲な者はこの世にいない、と「慈悲」は「正義」を非難する。そして、自分については、次のよう

に称賛する ——

私は人間のあらゆる苦しみ仲間となるのです
私がいなければ誰も困っている人に施しを与えないでしょう
私こそが行って孤児達に支えを与え
私こそが困っている時に未亡人達の様子を見るのです
私によってこそ人の姿があり
私によってこそ世界に人の姿があるのです
さもなければ、人は罪と過ちの人形であり
私がいなければ、一体、人はどうなっていたことでしょう
ファラオの舟が滅却の海へと沈んでゆく時
私はその海岸に立って泣いていたのです
汝にもし—— おお、正義よ！—— この世で会っていたら
私の花園の春はとくに荒らされていたことでしょう

これを聞いた「正義」は、こう反論する ——

仁徳は確かに大切だが、節度というものが必要だ。汝のおかげで盗賊は勇気づけられている。法令は当てにならず、子は父の命令を聞かず、召使いは主人に領収書を渡さない。生徒は先生の脅しを相手にせず、悪人は警察をこわがらない。裁判所の役人の風紀も乱れている。一人の盗賊を許すのは、いくつもの隊商を危険に晒すこと。父に息子を怒らせないのは、息子を不法なままに放置しておくということ。先生の手を上げさせないのは、生徒のためにはならない。汝の甘い言葉には危険な毒が満ちている。汝の始まりは良いが、終りは悪い ——

荒地を町としたのはこの私なのです
新聞を自由にしたのはこの私なのです
私の命令によって審議会が任命され
私の意見によって帝国は民主的となったのです
私は専制のしるしを消し去ったのです
そして世界から奴隷制を滅し去ったのです
私は議會を数百もの国々に置いたのです
私は過ちから助かる道を指し示したのです
命令と法律は特定の家にとどまるものではなく
国家とは今や国民の議會のことなのです

私の居る所には秩序があり、私の居ない所には圧政がある、と「正義」が述べて反論を終える。するとそこへ「知恵」(‘aql) が通りかかる。両者の言い分を聞いて、「知恵」は、両者を戒めて、両者共必要なのだ、と説く――

汝等二人の間には元々何の違いもないのに何故争うのですか

汝等一つであるのに何故喧嘩するのですか

同じ一つのものなのです――時にはその名を正義と言うのです

虐げられた者の不満を聞くことがその仕事なのです

慈悲と呼ばれるのは、虐げられた者の不満を聞く時

正義とされるのは、罰を無慈悲な暴君に与える時

この「知恵」の言葉を聞いて、「慈悲」と「正義」は仲直りする、というのが、この詩の結末である⁽⁶⁾。

ギャルサン・ド・タッシーによると、「ホルロイド少佐やたくさんのインド人がこの詩会に参列していた。詩人の中には、スィースターンのミールザー・ムハンマド・アクバル・カーン・カーワル (Mīrzā Muḥammad Akbar Khān Khāwar) も加わっていた。彼は、『詩人の君主』 (Sulṭān al-shu‘arā) という称号を得ていた。詩の水準は、一般的に表面的で、アーザードの作品は、以前より一層悪くなっていた。もっとも、ハーリーの詩は、大変熱心に傾聴された。実の所、これらの詩会を通して、彼は皆の注目の的となっていたのである。」⁽⁷⁾

別の所で、ギャルサン・ド・タッシーは、1874年11月20日付のパンジャブ協会の新聞の記事を引用しているが、それによると、この詩会は盛会であり、ホルロイドもこれに満足していたように思われる――

「今やパンジャブ協会は、プリンス・オブ・ウェールズの後援を得る榮譽に浴している。その1874年11月に開催された、月例の詩会では、決められた集会場に、カレッジの学生、町の有力者、進歩を望む人達の他、有名な詩人達が集まった。パティヤーラーの首相カーリーファ・ムハンマド・ハサン (Khalīfah Muḥammad Ḥasan) も、教育相のカーリーファ・ムハンマド・フサイン (Khalīfah Muḥammad Ḥusain) やパティヤーラーの他の高官を伴なって臨席されていた。協会の創立者でパンジャブ教育局の局長ホルロイド少佐も、集会の威厳を高められていた。詩人の中では、アター (‘Aṭā)、ハーリー、アーザード、キシヤン・ラル (Kishan Lāl)、ハキール (Ḥaqīr)、ラフィーク (Rafīq)、フマー (Humā) といった詩人が重要である。彼等は、『正義』という詩題で詩を聞かせた。外から寄せられた数篇の詩も読まれた。その中のいくつかは、他の詩題に関するものであった。この詩会は大変成功し、詩人達は、大いに称賛された。ペルシア語とアラビア語の他、ウルドゥー語にも大変堪能なホルロイド少佐自身、大層満足された。」⁽⁸⁾

（８）第７回詩会

第７回詩会の詩題は、「仁徳」（muruwat）で、1874年12月19日に開催され、14名の詩人が参加した。

アーザードがこの詩会で発表したのは、「正義の別離」（Widā‘-e inṣāf）という、119詩句から成るマスナヴィーである⁽⁹⁾。

このマスナヴィーは、朝の訪れの描写から始まる。早朝の礼拝の刻を告げる声を聞いて、「私」は詩作の手を止め、散歩に出かける。見ると、人々が荒野の方に歩いてゆく。驚いて何かと尋ねるが、誰も答えてくれない。「私」も人々について行く。すると町から出てしまい、ラーヴィー川の畔が見えてくる。道端の木影に、見ると、一人の王が、立腹した様子で坐っている。その前では、人々が泣いている。

王は、腰から剣をはずし、王冠を脱ぎ捨てた。「私」は驚き、どうしたのかと人々に聞くが、人々は茫然としており、答えてくれない。やっと一人の老人が、教えてくれた。あれは、この世に仁徳を行き渡らせていた「仁徳の王」であり、この世の様子が変わり、人々が信仰を失ったのを見て、隠棲しようとしているのだ、と。

王は、立ち上がり、「先の事を考えぬ者どもよ」と人々に呼びかける――

大天使が私をこの世に送ったのだ
全世界の神の被造物の間で
仁徳の教えが彼等のものとなるように
そして体制が仁徳に基づくようになるように、と
互いの友好によって皆の事が運び
善行によって皆の名が世に広まるように、と
神がこの世界を生み出した時
そして世界を因果の世界とした時
ここでは、一人の仕事は他の一人に依存しており
そして二人には互いに鎖がつながっており
そのつながりを離すのは可能ではなく
そして離れて事を為すのは可能ではない
互いに付き合って皆がこの世で暮らしてゆけるように
互いの仁徳に皆の支えがあるようにすべきなのだ
そして皆に世界の神の支えがあるように
それなくして世界の存在がないようにすべきなのだ
しかし、ここでは皆、高慢の酒を飲んで坐り込んでいる

傍らに神性の主張を抱えて坐り込んでいる
彼等の高慢は天よりも高く
そしてさらに我がままと利己主義がある
この人々は他人への悪を善と考え
そしてこの世の誰も眼中にはない
ああ、我が位階を誰も知り得なかった
そして私が説いたことを誰も受け容れなかった
しかし、この世でこのような事を行っている者達は
或る日、その結果を自ら見ることになるだろう
今、世の人々は我が敵であるけれども
そして我が敵は真理を消し去ろうとしているけれども
しかし、皆、敵意を持つがままにしておけばよいのだ
脱がれて何処へ行かれよう、ここに私がおり、彼等もいるのに

するとそこへ二人の男が泣きながら現われる。この二人は、「仁徳の王」の宮廷で大臣の職にあり、この二人によって「仁徳の王」の統治が行われていた。この二人の内、一人は、「慈悲」(rahm)であり、もう一人は、「恵み」(karam)であった。

二人は王の前に来て、王にこう述べる――

確かに、この世には、忠誠は影も形もなく、安らぐこともできません。世の人々は、皆、嘘の物語に心を捧げており、また、何時でも刃向かうつもりでいます。陛下の決心は全く正しいとは申せ、しかし、この世には、誠実の美德を持った人もいます。こういった人達は、陛下の前で、一度感謝したいとのみ念じているのです、と。

これを聞いて王は感銘を受け、願いを聞き入れようと言う。かくして人々が次々と王に感謝するために現われる。最初に現われた一団の中には、寛大さで有名なハーティム・ターイーがいる。次には、威厳のある人々が現われる。これは、正義の国の君主達であった…。

ここでこのマスナヴィーは、中途半端に終わっている。ギャルサン・ド・タッスィーは、この詩会について、記録を残していない。

（9）第8回詩会

1875年1月30日に開催された第8回詩会の詩題は、「満足」(qanā‘at)で、18名の詩人が参加した。

ギャルサン・ド・タッスィーによると、この詩会は盛会で、土地の有力者やラホール・カレッジの学生、多くの一般大衆が参列した。いつものように、まず、送付されてきた詩から詩会は始

められ、その後、若い詩人達が自作を発表した。若い詩人達に次いで、アーザードら年長の詩人達が詩を発表したが、ギャルサン・ド・タッシーの言によると、「彼等はその洗練された表現形式、整序された想像力で全員を魅了した」という⁽¹⁰⁾。

この詩会でアーザードが発表したのは、120詩句から成る「満足の宝庫」(Ganj-e qanā 'at) というマスナヴィーである⁽¹¹⁾。

このマスナヴィーも、寓話的な内容で、人間の魂の中を、想像力を駆ってはっきりと見ることのできる「私」が登場する。「私」は、いろいろな心を通り抜けた後、一つの清らかな心に入り込む。そこでは宴が行われており、光が輝いていた。宴の主人は、老若男女から尊敬され、「満足様」(Khawājah qanā 'at) と呼ばれる人であった。彼は世の中に何の関心も持たず、世俗の欲望を決して持たなかった。

或る日、彼の許に一通の手紙が届く。そこには、世の人々が欲望の囚となっていることが詳しく記してあった。「満足様」は、これを読んで嘆き、このことを大天使に知らせる。「満足様」自身も、手紙を書く——世界は貪欲に支配され、信仰は失われてしまいました。私はもうここに住むのは御免です。呼んで下さればすぐに参ります、と。

人々の様子を知ると、大天使はすぐに人々を全員召集するように命じる。謁見場には心の中をはっきりと映し出すことのできる鏡が置かれる。

人々が集まってき、そして集団毎に分けられる。各集団が、鏡の前に進み出る。最初に現われたのは、世間では軽視されているが、卓越した学芸を飽くことなく求める人々。大天使は彼等に栄誉を授ける。

その後もう一つの集団が現われたのです

そしてそれには奇妙な光景が見られたのです

貪欲に我先にと現われたのです

しかし神秘の鏡の前に進み出ると

そこに頭から爪先まで姿が映ったのです

そこに動物の姿が映し出されたのです

その体には口もなく喉もなく

食事をするために全身胃となっていたのです

満足すべき物を何も持たず

蠅のようにあちらこちらとたかっていたのです

汚名の中で日々を送り

そして唇は蠅のようになめていたのです

しかし、彼等の貪欲の震えは減らなかったのです

ふるいのように、彼等の胃は一杯にはならなかったのです

次に現われた、安楽を貪る者達は、牛の姿で鏡に映り、その次の偽善者達は、狐の姿、と詩は続くが、種が尽きたかのように、唐突に詩は終わられている。

(10) 第9回詩会

「文明」(tahdhīb) という詩題で、1875年3月13日に開催された第9回詩会については、詳細が不明である⁽¹²⁾。ムハンマド・サーディクが引用している新聞記事には、「この3月13日に協会で詩会が行われたが、詩人達の中に有名な詩人は一人もいなかった。そのため、この度は、アーザード氏は、大いに満足して、そして晴れ晴れと自作のマスナヴィーを読んだ。この集会には、アーザード氏以上に有名な詩人は他に一人もいなかったが、この集会は、以前になかった程、活気がなかった。優れた詩人は一人もおらず、高い見識を持った人々もいなかった。多分、デリー・ダルバールで、多くの人々がデリーに行ってしまったため、この集会は活気がなかったのだと思われる」とある⁽¹³⁾。この記事はさらに続けて、ラフィークという詩人が、書記の制止もきかず、『パンジャービー・アクバール』を非難した、と記している。ラフィークは、アーザード派の詩人であり、ここで恐らく、いつもアーザードに批判の目を向ける新聞『パンジャービー・アクバール』に毒づいたのであろう。この記事を書いたのはアーザードに批判的な人物であるから、この記事をもそのまま信用する訳にはいかないが、第9回詩会は、いつもとは異なった雰囲気で行われたと推測される。

さて、この詩会でアーザードが発表したマスナヴィー「文明の根源」(Maṣḍar-e tahdhīb) について検討してみよう。これは144詩句から成り、⁽¹⁴⁾

地上に太陽の最初の視線があった日
 そして世界の創造物の最初の朝があった日
 全ての元素の性質は中庸にあり
 そして中庸によって全ては完璧だったのです

と、世界の太初の描写から始められている。

太陽の恵みは普く、世界には何も危険も困難もなかった。大天使は世界を優しく見守っていた。大天使は、愛情を示すため、地上に「仁徳の王」(Khusrau-e akhlāq) を派遣する。「仁徳の王」は、誰彼の区別をすることなく、全ての者に恩恵を施したので、その名声を慕って、各地から人々がやって来る。やって来た人達は、皆、栄誉、称号を与えられる。その中に、「悪ふざけ」(hazal)、「嘲笑」(tamaskhur) そして「頓智」(zarāfat) もいた。彼等は宮廷のお気に入りとなり、「悪ふざけ」と「嘲笑」は大臣に、「頓智」は廷臣となる。これは世に悪影響を及ぼした。礼儀作法は乱れ、誠実さがなくなってしまった。この有様を、「仁徳の王」は大天使に書き送る。

その結果、天上より、「怒り」(qahr) が派遣されてくる。「悪ふざけ」、「嘲笑」、「頓智」は恐れをなして逃げてしまう。礼を欠いた人々は、罪を問われ、恐れおののく。

王は、人々の困窮を見るに見かね、「文明」を地上に送らせる。

地上に降り立った「文明」は、「理性」を大臣として、人々の秩序の回復に努め始める。まず、第一に、学校教育に関して布告が出される ——

即ち、まず最初に「文明」が式典を催した時

人々の秩序について次のような整備をまず行ったのです

世界のあちらこちらにある学校では

そこでは新しい布告が強く実施されなければならないのです

ここの少年達は非常に努力をしていますが

口で単語や意味を記憶してはいますが

しかし、心にはその影響が全くなく

そして世の人々は彼等に信頼を置いていないのです

もし、心に影響があるならどうして実行しないのでしょうか

自分の悪を善にしようとしてしないのでしょうか

とかくする内もう一つの布告が出されたのです

諸々の協会の会合が至る所で行われているが

それらの議論は口に頼るものであってはならない

それらは皆雑誌に載せて広められなければならない

それらの目的の恩恵が世に広く行き渡るように

学問の論議が全世界で行われるように

しかし、それについては次のことが強調されなければならない

利益になる事は皆心に留められなければならない

一致団結してそれを前進させるようにしなければならない

そして対立によって事を決して壊したりせぬようにしなければならない

以上の詩句でこの詩は終わっている。

通説では、1875年3月13日の第9回詩会をもって、所謂パンジャブ協会の詩会は終了したとされている。しかし、サフィヤ・バーノーは、アーザード家所有のパンジャブ協会関係資料の中に、「徳性」(akhlāq) に関して、ファイズという詩人の書いた詩の草稿があること、そして『アーザード詩集』に、「真の品格」(Sharāfat-e ḥaqīqī) という、「徳性」に関係したマスナヴィー

が収録されていることから、「徳性」という詩題で第10回詩会が行われたのではないかと推測している⁽¹⁵⁾。

「真の品格」は、33詩句から成る短いマスナヴィーであるが⁽¹⁶⁾、内容的には、家柄よりも個人の能力の方を重視する思想を明確に打ち出している点、暗記中心の勉学を批判し、身を修めるような勉学、社会に有益な学問を奨励している点で重要な作品である――

私は決して尋ねたりはしない、汝の名が何であるのか

先祖の名や土地が何であるのか

家柄に用はなく、財産にも用はない

ここでは名にも印にも用はない

汝の働きが良ければ名は良く

家柄も良く、家も良く、全てが良い

無から現われ、どの土の上にまず落ちたのか

最初に足を踏み出したのは、どの地面であったのか

汝が少年時代を王宮で過ごしたのか

それとも貧苦の中で掘立小屋で育ったのか

私にはその誇りもなければ恥じらいもない

しかし、尋ねる事があるとすれば、尋ね続ける事がある

即ち、仁徳の国を歩んでいるかどうか

軒高な意気が手中にあることを表しているかどうか

私には興味がない、汝がカレッジで学んだか否かということは

学年の階段を汝が上がったか否かということは

本を読んで暗唱しても何になろう

そしてその試験を受けて通ったとしても何になろう

汝の振る舞いにまで何か影響があったか否か

口で唱える声が心にまで届いたか否か

口で唱えていることの、その影響は心で受け止めよ

書物に書かれていることが心に住み着くように

言葉と心が互いに一つとなる時

人もまた当然善良となる

学ぶのは誰も彼も学んでいる

数千の鸚鵡が章句を学んでいる

私に言わせれば、その知識はまだ不十分なのだ

その知識が完全となるのは、遍き恵みを与える時

他の人々に益のない知識は

我々の前では、あってもなくても同じなのだ

実のところ、「パンジャブ協会の詩会」運動に関しては、具体的な資料がほとんどなく、第1章で見たように、その終了の理由も不明であるが、実際に何回詩会が開催されたのかという基本的な点すら不明であると言わなければならない。ギャルサン・ド・タッシーは、1875年のヒンドゥースターニー語の発展を振り返りつつ、「3月の会合のために、『文明』というのが、詩会の題目に決定された。その時から今までに数回の詩会が行われた」と述べており、10回以上の詩会が開催された可能性もある⁽¹⁷⁾。詩会運動の歴史的解明は、尚、今後の課題なのである。

註

- (1) サフィヤ・バーノーによると、第5回詩会の行われたのは、1874年10月8日である。下記の書を参照。
Şafiyah Bānō, *Anjuman-e Panjāb: Tārīkh-o-Khidmāt*, Karachi, 1978.
- (2) 第5回詩会から第8回詩会までの参加詩人については、タバッスム・カーシミーリー編『アーザード詩集』に収められているアーガー・ムハンマド・バーキルの「自然の詩」を参照。
- (3) ムムターズ・アリー版でも169詩句ある。但し、語句はかなり異なる。
- (4) Aslam Farrukhī, *Muhammad Husain Azād: Hayāt aur Taṣānūf*, Vol.1, Karachi, 1965, pp.279-280.
ファールキーによると、アフマド・カーンのこの手紙は、アーザードへの返事である。アーザードの手紙は残っていないとのことであるが、「お知らせの状況が分かりました。全く悲しむべきことです、一度もムスリムの間には一致を見たことはないのです。詩に対する賛否と互いの対立とは別物なのです」というアフマド・カーンの手紙の文面から、詩会を巡る対立を知らせる内容のものであったと推測される。

尚、アフマド・カーンは、この手紙の中で、次のように、詩会を高く評価している。

「私のずっと古くからの願いは、この詩会によって実現しました。我が詩人達が自然の諸相の叙述に関心を持つように、と私はずっと願っていたのです。」

また、アフマド・カーンは、1875年2月7日付けの『倫理の純化』(Tahdhīb al-Akhlāq)に文芸に関するエッセイを執筆・掲載し、その中で、「ラホールでナチュラル・ポエトリーの詩会が開かれた1874年のあの日は、ウルドゥー語の文学の歴史に永遠に記憶されるであろう」と記し、さらに次のように言葉を続けている。

「パンジャブ州知事閣下とパンジャブ州教育局長ホルロイド氏は、この詩会の設置に多大の関心を払った。このことに対する感謝は、我が民族の義務である。我が民族の有能な人士も、これに関心を向けた。マウラヴィー・ムハンマド・フサイン・アーザード(ラホール・ガヴァメント・カレッジ アラビア語教授)は、この詩会の設立と存続に誰よりも力を尽くした。その性格の力強さ、内容の清らかさ、語句の荘重さ、表現の仕方から我々は教訓を得ている。『パンジャブの太陽』(Aftāb-e

Panjab)に掲載されたアーザードのマスナヴィー『平和の夢』は、我々の心を情眠の夢から目覚めさせる。パンジャブ州教育局副翻訳官マウラヴィー・カージャ・アルターフ・フサイン・ハーリーのマスナヴィーは、我々の心の状態を一変させた。『パンジャービー・アクバル』に掲載されたハーリーのマスナヴィー『愛国心』とマスナヴィー『慈悲と正義の論争』は、全く、我々の時代の傑作である。その言葉の簡潔さ、叙述の清浄さ、思想の高尚さは、我々の心を思わず引き付ける。それらのマスナヴィーは、清流よりも心地よく、叙述、言葉、詩興、単語の配列、簡潔さ、清浄さに於いて何と素晴らしいことであろうか。心に染み入ってくるのである。勿論、我々のこの自慢すべき詩人達は、今尚、ネーチャーの領域に到達するために前進しなければならず、また、その詩句をナチュラル・ポエトリーに匹敵させるためには、数多くのことをなさねばならないというのは確かである。しかし、これらのマスナヴィーを見ると、思考に少しは変化が生じたと確かに思われてくるし、また、こうも思われるのである——もし我が民族がこの素晴らしいネーチャーという内容に関心を向け、そしてミルトンやシェークスピアの思想に注意を向け、恋愛という内容、空想的な内容と事実の描写という内容、ネーチャーという内容との間にある違いに心を留めたならば、この優れた人々によって我々の民族の文学は如何に素晴らしいことになることか、と。そして我々もまた、我々の民族の詩人の誰かを、あたかもヨーロッパの人々がミルトンやシェークスピアを誇るように、誇る日が必ずや来るであろう、と。事実の描写という内容とネーチャーという内容は近似しており、両者は混同されるが、しかし、実際には前者は後者と全く異なる。前者は一つの外面的状態であり、後者は内面的なのである。この後者にこそ心を感動させる力がある。未だ我が民族の作品は、外面的状態の方に多く関連しているが、急速にそれは内面的状態にも到達すると期待できるのである。」(ファッルキー、上掲書、pp.280-282.)

- (5) ムムターズ・アリー版では、191詩句。語句の異同がある。
- (6) この詩の中でもハーリーは、次のように、ヒンドゥーを意識した詩句を入れている。

ラーヴェナの軍勢を戦闘で潰滅させたのは誰ですか
火をランカーに汝以外の誰が放ったでしょうか

両親の従順で善良な息子達は
ラーマ、ラクシュmanaのようにそこでは放浪しているのです

(前者は「慈悲」が「正義」を非難する場面、後者は「正義」が反論する場面で用いられている。)

- (7) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, Karachi, 1975. p.38.
- (8) *Ibid*, pp.151-152.
尚、引用文では、ホルロイドを協会の創立者としてあるが、これは、ギャルサン・ド・タッシーの誤解。
- (9) ムムターズ・アリー版では、117詩句。語句の異同がある。
アーザードが、詩の題名を何故 Widā‘-e muruwwat とせず、Widā‘-e inṣāf としたのかは不明である。ファッルキーは、アーザードが、muruwwat と inṣāf とを同じものと考えていたのではないかと推測している。(Aslam Farrukhī, *Muhammad Husain Azād: Hayāt aur Taṣānīf*, vol.2, Karachi, 1965, p.582.)
尚、muruwwat には、「男らしさ」、「礼儀正しさ」、「寛大さ」、「慈悲」、「美德」といった様々な意味がある。
- (10) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, vol.2, pp.152-153.
尚、ギャルサン・ド・タッシーは、この詩会に関連して、パンジャブ協会会報の次のような論説を紹介しているが、これを見ると、詩会の運営者達が、若い詩人を積極的に動員してウルドゥー詩改革の詩会を推進しようとしていたことが分かる。
「もし、豊富な思想を持ち、言語の美を持つ詩人達が、このことに関心を持つ青年達に、この詩会に

参加するよう勧めることができ、そして練習と添削を与えて、彼等をこれのために準備させることに留意したならば、優れた詩作への関心はインド中に広まり、その影響は不滅なものとなるであろう。詩会の創始者達の念頭にあった道徳的改革という目的は達成されることであろう。」

- (11) ムムターズ・アリー版では、119詩句。語句の異同がある。
- (12) アーガー・ムハンマド・パーキルの「自然の詩」にも、ギャルサン・ド・タッシーの Maqālāt に
も言及がない。
- (13) Muḥammad Ṣādiq, *Āb-e Hayāt ki Himāyat meṇ aur Dūsrē Maṣāwīr*, Lahore, 1973, p.106.
- (14) ムムターズ・アリー版には、収録されていない。
- (15) 註(1)で挙げた文献を参照。
- (16) ムムターズ・アリー版でも33詩句あるが、多少語句が異なる。
- (17) *Maqālāt-e Garcin de Tassy*, Vol.2, p.153.
尚、ギャルサン・ド・タッシーは、1876年のヒンドゥースターニー文学を回顧しつつ、以下のよう
に述べている。

「これに関して、パンジャブ州政府の指導の下、ラホールで行われている詩会についての記事は、
今年の新聞には現われなかったと言わねばならない。尤も、デリー、カルカッタやインドの他の大都市
では、その好評が今尚続いている。」(上掲書、p.311.)

(1991. 9. 17 受理)